

第三章 玉鬘の物語 玉鬘、右近と椿市で邂逅

[第一段 岩清水八幡宮へ参詣]

九条に、昔知れりける人の残りたりけるを訪らひ出でて(昔見知っていた人が今でも住んでいる所を尋ねて探し出して)、その宿りを占め置きて(一行は腰を落ち着けたが)、都のうちといへど(京の町中と言っても)、はかばかしき人の住みたるわたりにもあらず(その辺りは一角の人が住む一帯ではなく)、あやしき(賤しい)市女(いちめ、物売り女)、商人(あきうど、商売屋)のなかにて(の中で暮らして)、*いぶせく世の中を思ひつつ(先行きに目処が立たないまま)、*秋にもなりゆくままに(二ヶ月ほどが過ぎて秋になって行くと)、来し方行く先(過去や未来が)、悲しきこと多かり(悲しく思えることばかりでした)。 *「いぶせし」は<先が見通せず心が晴れない>。「世の中を思ふ」は<生計や事業の手立てを考える>。 *「秋にも」は注に<七月になった。>とあり、さらに<上京したのが四月二十日前、「延喜式」によれば、都まで海路三十日とあるが、「思ふ方の風さへ進みて、あやふきまで走り上りぬ」とあったから四月の末ないし五月の初めには都に着いていたものと思われる。>とある。

豊後介といふ頼もし人も(豊後介という頼みの人も)、ただ水鳥の陸に惑へる心地して(ただ水鳥が陸に上がって覚束無くしているように)、つれづれにならぬありさまの(何も出来ずに都に慣れない我が身の)*たづきなきを思ふに(身寄りの無さを思うと)、帰らむにもはしたなく(国へ帰るのも格好が付かず)、心幼く出で立ちにけるを思ふに(早まって出てきてしまったかと考えていると)、従ひ来たりし者どもも(付き従って来ていた者どもも)、類に触れて逃げ去り(親戚を頼って逃げ去り)、本の国に帰り散りぬ(元の国に散り散りに帰って行ってしまいました)。 *「たづきなし」は<方法が無い、頼る宛が無い、身の寄せ所が無い>で、具体的には<収入が無い>ことと<その為の伝手も無い>ことを言っているようには思うが、そこまでは言い換えないで置く。

住みつくべきやうもなきを(無職で収入が無くては、豊後介には住み着く場所が得られそうも無い窮状を)、母おとど(母御は)、明け暮れ嘆き*いとほしがれば(朝晩の食事にも困る事で実感して自分が上京を迫った事を頻りに悔やんだが)、 *「いとほし」は<物事を厭わしく考える>が原義と思われ、他者への推量なら<困窮しているかと思ひ遣る→不憫に思う、気の毒に思う>だが、自分の状況なら<愚痴る、悔やむ>だろう。「がる」は<頻繁にする>。

「何か(何も気にする事はありません)。この身は、いとやすくはべり(私は大丈夫です)。人一人の*御身に代へたてまつりて(姫君お一人の御命にこの身を代えて捧げ申して)、いづちもいづちもまかり失せなむに咎あるまじ(何処へなりと行って死のうとも構いません)。我らいみじき勢ひになりても(我ら一族が栄える勢力と成り得ても)、若君をさるものの中にはふらしたてまつりては(姫君を監一族に人身御供として捧げたのでは)、何心地かせまし(何の誉れを胸に抱けるでしょう)」 *「おんみにかへ」は、豊後介が上京を決意するに至る説明に<姫君の人知れず思いたるさまの、いと心苦しくて、生きたらじと思ひ沈みたまへる、ことわりとおぼゆれば、いみじきことを思ひ構へて出で立つ。>に呼応した言い方、なのだろう。

と語らひ慰めて(豊後介は話して母を慰めて)、

「神仏こそは(今後の事は神仏こそが)、さるべき方にも導き知らせたてまつりたまはめ(然るべき道に姫を導き申しなさるでしょう)。近きほどに(ここから近い所にある)、八幡の宮(やはたのみや、石清水八幡宮)と申すは(と申す祭神は)、かしこにても参り祈り申したまひし(彼の地にても参拝なさっていた)松浦(まつら、唐津鏡神宮)、*宮崎(はこざき、筑前博多宮崎宮と)、同じ社(やしろ、守り神)なり。 *「八幡の宮」は注に<石清水八幡宮>とある。近いと言っても平安京から南西の男山の山頂にあり、北東の比叡山延暦寺に相対する都の守護神という位置付けになっていて、Wikiに拠れば<「石清水」の社名は、もともと男山に鎮座していた石清水山寺(現在は石清水八幡宮の撰社)に由来する。>との説明もあった。 *「宮崎」は筑前の宮崎宮、とのこと。因みに八幡祭神は応神天皇、宗像女神、神功皇后とされるらしいが、神話時代の王は未だ仔細不明のようで良く分からない。ただ、基本的には軍神のようで、鏡神社も神功皇后が朝鮮出兵の戦勝祈願をしたのが始まり、と社伝にあるとか。

かの国を離れたまふとても(かの国を離れなさるにつけても)、多くの願立て申したまひき(姫は多くを願をこの祭神に立て申しなさって来ました)。今、都に帰りて、かくなむ(こうして無事に)御験(おんしるし、御霊験のお蔭)を得てまかり上りたると(を持って上京を果たしましたと)、早く申したまへ(早く八幡宮にお礼を申し上げなされませ)」

とて(と言って姫に)、八幡に詣でさせたてまつる(八幡詣でを為さるよう申し上げます)。そののわたり知れる人に言ひ尋ねて(そして豊後介はその辺の事情を知っている人に問い尋ねて)、五師(ごし)とて、早く(以前に)親の語らひし(亡き父親が懇意にしていた)大徳(だいとく、高僧が)残れるを呼びとりて(まだその山寺に在職しているのを呼び出して)、詣でさせたてまつる(その者の案内で、姫に滞り無くお参りをさせて差し上げます)。

[第二段 初瀬の観音へ参詣]

「うち次ぎては(この次には)、*仏の御なかには(御寺の中で)、*初瀬なむ(長谷寺が)、日の本のうちには(日本の中に在っては)、あらたなる験現したまふと(目にも明らかな超常現象をお示し下さると)、唐土(もろこし、大陸)にだに聞こえ*あむなり(にまで名が及んでいるとのことです)。 *「ほとけ」は広く言えば<仏教の信仰心>だろうし、その<徳>であり、精神を集中するための対象としての<仏像、仏画>を言う場合もあるだろうし、恐らくは<観音像>を意識した言い方ではありそうだが、此処での話題は先ず所在地と見て、その祭礼所としての御講堂たる<お寺>を言うを読む。 *「初瀬(はつせ)」は<奈良県桜井市の地名。初瀬山(はつせやま)山腹の長谷寺の門前町。>と大辞泉にある。今の地名の奈良県桜井市初瀬の「初瀬」の読みは「はせ」。私のような関東者は、「長谷観音」と言えば鎌倉大仏と連想するが、初瀬の「長谷寺」が総本山らしい。ところで、総本山の地名は「初瀬」表記であり、寺こそが「長谷」表記である。「初瀬」を「はせ」と言うのは音便として理解しやすいが、「長谷」を「はせ」と読むのは私が子供心に抱いた疑問でもある。そこでこの際にと「長谷とは」でWeb検索すると、「はてなキーワード」に<そもそもは現在の奈良県桜井市にある泊瀬(はつせ。表記は「初瀬」とも)>という土地のこと。同地が長い溪谷状の地形であることから「ながたにの」という言葉が「泊瀬」にかかる枕詞のようになり、やがて「長谷」と書いて「はつせ」「はせ」と読まれるようになったという。>と解説されていた。だとすれば、「やまとことば」が「日本語」なのだと、改めて実感させられる。 *「あむなり」は「あるらむなり(〜ているらしいです)」ではなく、「あるなむなり(〜ているとのことです)」と読む。不確かな推量ではなく、確かな伝聞でなければ、以下に続ける言葉の説得力が無い。

まして(まして外国ではなく)、わが国のうちにこそ(この国の中であってみれば)、遠き国の境ととも(辺境な西海道と言っても)、*年経たまへれば(長年に渡って神仏をお参りしていらしたのだから)、若君をば(姫君を)、まして恵みたまひてむ(なおさら恵み下さるでしょう) *「経(ふ)」は<時が過ぎる>で、「年経(としふ)」は<何年も過ぎる>で、「年へたまふ」は<長年お暮らしになる>という意味だ。が、此処の「へたまふ」は「まして恵みたまふ」に「れば」の条件で「てむ」と見込める、という文構造なので、「恵み」が期待できる行動を示している、と読まざるを得ない。で、「恵み」を期す行動は<お参り>。

とて(と豊後介は言って)、出だし立てたてまつる(姫を大和路に出立させて差し上げます)。ことさらに(願掛け修行だからと、敢えて)徒歩より(かちより、御車ではなく徒歩で)と定めたり(と決めたのです)。ならばぬ心地に(姫は慣れない負担感に)、いとわびしく苦しけれど(とても情けなく苦しかったが)、人の言ふままに(付き人に励まされて)、ものもおぼえで歩みたまふ(今は他の手立てなど考えずに歩きなさいます)。

「いかなる罪深き身にて(どのような罪深い前世の縁で)、かかる世にさすらふらむ(私はこのように世の中を流浪するのだろう)。わが親(母上、あなたは)、世に亡くなりたまへりとも(もし亡くなっていらしたとしても)、われをあはれと思さば(私を不憫にお思いなら)、おはすらむ所に誘ひたまへ(今御出での所に私を導いて下さい)。もし、世におはせば、御顔見せたまへ」

と(と姫は)、仏を念じつつ(目指す観音様を心に念じながら)、ありけむさまをだにおぼえねば(会ったであろう姿さえ覚えが無いので)、ただ、「親おはせましかば(母上が生きていらっしゃるなら)」と、ばかりの悲しさを(一途な悲願を)、嘆きわたりたまへるに(嘆き続けていらしたが)、かくさしあたりて(こうした難行に向き当たって)、身のわりなきままに(身の置き所が無いままに)、取り返しめじくおぼえつつ(何度も限界を感じながら)、からうして(辛うじて)、*椿市(つばいち)といふ所に、四日といふ(よかといふ、京を発って四日目になるという)巳の時ばかりに(みのときばかりに、午前十時になる頃に)、生ける心地もせで(生きた心地もしないほど疲れ果てて)、行き着きたまへり(到着なさいました)。 *「椿市」は奈良県桜井市大字金屋にある海石榴市観音(つばいちかんのん、海石榴市は万葉集に詠まれた漢字表記とのこと)のあたり、とされているらしい。「海石榴市観音」については、「ぶらぶら歩記」というサイトの「海石榴市はどこ?」と「初瀬街道」というページの記事と特に写真が興味深かった。市が立つからには、街道が交差し、水路が近く、人と物が数多く行き交う場所が推定される、というそのページの指摘は説得力がある。ただ、そのページでの結論は「椿市」の位置確定には未だ至らず、ということのようだ。が、此処での文意は「長谷寺」に向かう三輪山の南麓付近の参道口に当たる所の、市が立つ繁華な町に到着した、ということだろう。ところで、京都から桜井までは、ざっと JR で奈良駅までと奈良駅からは桜井線で桜井まで、ということで良さそうだが、この際、地図上で辿ってみた。今の道と同じとは思わないが、道は地形に規定されるから、おおよその道のりは、当時も同じか近いはずだ。九条から国道 24 号を南下する。伏見からは宇治よりに 69 号を進み、城陽でまた 24 号に合流する。そのまま一気に 24 号を橿原へ目指すのも一興だが、棄てた平城京よりは東大寺や春日大社だろうと木津を越えたら 754 号へ進む。そしてそのまま 169 号に入って、かの石上神宮から巻向を経て三輪へ至る、というのはどうだろう。一行の徒労が少しは偲ばれる。なお、注には<京から椿市までは牛車で三日の行程であった。玉鬘は徒歩で四日目の巳の刻(午前十時頃)に到着した。>とある。

歩むともなく(とても順調に歩むという有様ではなく)、とかくつくろひたれど(休み休みや騙し騙しで何とか遣って来たが)、足のうら動かれず(もう一步も踏み出せずに)、わびしければ(困

り果てて)、せむかたなくて休みたまふ(まだ昼前だったが、姫は仕方なくこの日は此処で休息を取る事に為さいます)。

この頼もし人なる介(この一行は世話役の豊後介に)、弓矢持ちたる人二人(護衛に弓矢を持った武者が二人)、さては下なる者、童など(その他には荷物持ちの下男や小僧などが)三、四人(みたりよたり)、女ばらある限り三人(女房は三人全員が)、壺装束して、*樋洗めく者(ひすましめくもの、尿瓶係りのような)、古き下衆女二人ばかりとぞある(年老いた下女の二人だけが同行していました)。 *「樋(ひ)」は<竹や木で造った送水管>と古語辞典にあるが、此処の「樋」は「樋箱(ひばこ)」を言う、とのこと。「樋箱」は<便器>だが、此処では特に<携帯便器>というから、木製の尿瓶と言った所か。当時の貴族の必需品とのことで、当然に下女が使用の都度洗って、次の使用に備えるので、その尿瓶係りの女が「樋洗しめく者」、とのこと。「御厠人(みかはやうど)」ともある。

いとかすかに忍びたり(一行はごく少ない人数で目立たないようにしていたのです)。大御燈明(おほみあかし、仏に供える灯明)のことなど(の準備などを夜のお参りのために)、ここにてし加へなどするほどに日暮れぬ(此処で買い揃えているうちに日は暮れました。すると、)。家主人の(いへあるじの、その宿坊の主人である)法師(ほふし、仏僧が)、

「人宿したてまつらむとする所に(私がある人をお泊め申そうと心積もりしていた部屋に)、何人のものしたまふぞ(誰かがお泊りになっているではないか)。あやしき女どもの(いい加減な手伝い女どもが)、心にまかせて(勝手な事をして)」

とむつかるを(と怒っているのを)、めざましく聞くほどに(一行は自分たちが邪魔者に思われていると不愉快に聞いていると)、げに(実際に)、人びと来ぬ(別の一行の人々が部屋に入って来ました)。

[第三段 右近も初瀬へ参詣]

これも徒歩よりなめり(この一行も徒歩でのようでした)。よろしき女二人(身なりの良い女が二人と)、下人どもぞ(従者たちは)、男女(男も女も)、数多かむめる(大勢居るようです)。馬(むま、馬に)*四つ、五つ牽かせて(よついつひかせて、荷箱の四つ五つを引き連れさせて)、いみじく忍びやつしたれど(ごくひっそりと目立たないようにしていたが)、きよげなる男どもなどあり(身ぎれいな下男らしからぬ男たちなども居ました)。 *馬の数え方が、一つ二つと物扱い、というのは如何だろうか。この物語でも「匹」という数え方はあったかと思うので、此処では一頭ないし二頭ほどの馬に、荷箱を四つ五つ引き連れさせた、のだろう。馬を五頭も引き連れていたのでは、「いみじく忍び寢し」ては居ない。

法師は(宿主の僧は)、せめてここに宿さまほしくして(豊後介一行に、どうか相部屋を願いたいと)、頭搔き*ありく(失態を詫びていました)。いとほしけれど(豊後介たちは不本意ながら)、また(と言って)、宿り替へむも*さま悪しくわづらはしければ(宿替えするのも目に付くし面倒だったので)、*人びとは奥に入り(男たちは部屋の隅に奥まって)、*他に隠しなどして(荷物を部屋の外に出して隠したりして)、かたへは片つ方に寄りぬ(女たちはもう一方の片隅に寄りました)。*軟障(ぜじゃう、垂れ幕)などひき隔てておはします(などを引いて姫は姿を隠していらっしゃいます)。 *「ありく」は<歩く、動き回る>ではあるが、古語辞典には(他の動詞に添加して)という条件付きで<

～して過ごす、立ち回る>の意味になると説明されている。「かしら搔く」は<自分に悪意は無いが悪い事態となった管理責任を感じて詫げる>態度だが、同時に事態を好転させる手立てはなく、その事態の受け入れを他者に強要してあるので、計算づくで<立ち回った>のである。 *「さまあし」は<見苦しい、体裁が悪い>とあるが、この無礼を断れない「いとほし」い立場にあるとすれば、それ自体が<体裁が悪い>ので、更に宿替えなどで移動するのは<見苦しい>というよりは、その動きで存在が<目立つこと自体を嫌った>、と読みたい。 *「ひとびと」は誰を示すのか、いつも分かり難い。ただ、前句の「わづらはしければ」の主語は豊後介一行であり、強いて言えば語り手が言う「人」は「豊後介」である。そして、後句に「かたへは(もう一方の人々は)」とあり、その人々は「おはします」と敬語表現されているので、その中に姫が居る事となり、以って「かたへ」が<女たち>であると知れる。以って、初めの「ひとびと」は<男たち>と読んだ。 *「ほか」は<外、別の所>と、古語辞典にある。 *「軟障」は<垂れ幕→柔らかい仕切り>、ということだろう。

この来る人も*恥づかしげもなし(そして後から来た一行も然程は偉そうでは有りませんでした)。いたう*かいひそめて(双方はまるで息を潜めるほどに)、*かたみに心づかひしたり(互いに気を遣っていたのです)。 *「はづかしげ」は<(他者が気後れするほど)優れている様、立派な様>という語法で、その(他者の)主語省略と相まって、いつも分かり難い。 *「搔い潜む」は<殊更に静かにする>。 *「かたみに」は<片身に>ではなく<互いに>。

さるは(この者は)、かの*世とともに恋ひ泣く右近なりけり(生涯お仕えすると今もなお夕顔を偲んで嘆いている右近、その人なのでした)。年月に添へて(年を追う毎に)、*はしたなき交じらひの(成り行きでの源氏大臣へのお仕えが)*つきなくなりゆく身を思ひなやみて(本分ではないと思えてくる自分の立場に悩んで)、この御寺(みてら)になむ(にですぬ)たびたび詣でける(たびたびお参りしていたのです)。 *「世」は<生涯>。夕顔の果てた<生涯>であり、生き残った右近の<生涯>でもある。 *「はしたなし」は<ちっちゃくつかずで収まりが悪い>とあり、右近は夕顔の女房だったので、成り行きで光君の女房に成らざるを得なかった、という<本意ならざる事情>を抱えている。「まじらひ」は女房たちに交じらう<宮仕え>または<お屋敷勤め>。 *「付き無し」は<頼りない、都合が悪い、相応しくない>。

例(れい、お参りの仕方は)ならひにければ(いつも同じだったので)、*かやすく構へたりけれど(右近は身軽な旅姿だったが)、徒歩より歩み堪へがたくて(徒歩での行程に疲れ果てて)、寄り臥したるに(肘掛に寄り掛かっていると)、この豊後介(先客の豊後介その人が)、隣の軟障のもとに寄り来て(直ぐ側の垂れ幕の端へ寄って来て)、*参り物なるべし(お食物なのだろうか)、*折敷手づから取りて(運んで来た御盆を誰かに手渡して)、 *「かやすし」は<簡単、手軽>。「まありもの」は<お食事物>。 *「折敷(をしき)」は<脚の無い食器盆、お膳>。

「これは、*御前に参らせたまへ(御方に差し上げて下さい)。*御台などうちあはで(御膳などが揃っていないくて)、いと*かたはらいたしや(大変恐縮ですが)」 *「御前(おまへ)」は<貴人>または<貴人の前、貴人の所>を示す語。 *「御台(みだい)」は<脚付きの御膳>。 *「傍ら痛し」は<傍目に見映えが悪い>で、そういう今の状態を世話役として<恐縮する>。

と言ふを聞くに(と言うのを聞くと)、「わが並の人にはあらじ(幕の向こう側に居るのは、自分のような低い身分の人では無さそうだ)」と思ひて(と思つて)、物のはさまより覗けば、この男の顔、見し心地す(見覚えがある気がしました)。

誰とはえおぼえず(しかし誰とは思い出せません)。いと若かりしほどを見しに(ずいぶん若かった時の様子を見たので)、太り黒みてやつれたれば(太って色黒になり貧しい身なりだったので)、多くの年隔てたる目には(長い年月を隔てて目にしても)、ふと見分かぬなりけり(直ぐには見分けられなかったのです)。

「三条、ここに召す(三条は居ませんか)」

と呼び寄する女を見れば(と呼び付けられた女を見れば)、また見し人なり(また見覚えがある人でした)。

「故御方に(亡き御方様に)、下人なれど(下女ではあったが)、久しく仕うまつりなれて(長く仕え親しんで)、かの隠れたまへりし御住みかまでありし者なりけり(あのお隠れになった五条の家でもお供していた者だ)」

と見なして(と見て取ると)、いみじく夢のやうなり(本当に夢のようです)。主(しう、主人)とおぼしき人は(と思える人は)、いとゆかしけれど(とても知りたかったが)、見ゆべくも構へず(見える状態ではありません)。思ひ*わびて(当惑しながら)、*「わぶ」は<嘆く、困る>ともあるが、<当惑する、困惑する>ともあり、<意外な事に興奮して、当惑していた>のだろう。

「この女に問はむ(この女に聞いてみよう)。兵藤太(ひゃうとうた)といひし人も(と昔に言っていた人が)、これにこそあらめ(あの男に違いない)。姫君のおはするにや(姫君はいらっしゃるのだろうか)」

と思ひ寄るに(と右近は考え付くと)、いと心もとなくて(もう気が気ではなくて)、この中隔てなる三条を呼ばすれど(ちょうど幕際に居る三条を呼び出させたが)、食ひ物に心入れて(食事に夢中で)、とみにも来ぬ(直ぐには来ません)、いと憎しとおぼゆるも(右近がどんなに憎らしく思っても)、うちつけなりや(三条には唐突な話でしょうに)。

[第四段 右近、玉鬘に再会す]

からうして(やっと女は)、

「おぼえずこそはべれ(呼ばれる覚えはありませんよ)。筑紫の国に、*二十年(はたとせ)ばかり経にける下衆(げす)の身を、知らせたまふべき(ご存知だと言う)京人よ(きやうびとよ、都の人よ)。人違へにやはべらむ(人違いではございませんか)」 *注に<実際は十六年間である。>とある。ただ、三条にしてみれば、夕顔失踪から九十七年過ぎて、十八年目の主探しではあったのかも知れない。

とて(と言って)、寄り来たり(右近に近付いてきました)。田舎びたる*搔練に衣など着て(女は田舎じみた赤い襦袢に着物を着て)、いといたう太りにけり(もうひどく太っていました)。わが齢もいとどおぼえて恥づかしけれど(その昔と変わった三条の姿に右近は自分も同じように、ずいぶんと年を取った事を思い知らされて気恥づかしかったが)、*「搔練(かいねり)」は<練って柔らかくした絹。練り絹。紅色のものについていうことが多い。>と大辞泉にある。

「なほ(もっと)、さし覗け(しっかり見なさいな)。われをば見知りたりや(この私を覚えているでしょうに)」

とて(と言って右近は)、顔さし出でたり(顔を突き出しました)。この女の手を打ちて(すると女は手を打って)、

「あが(これは)御許(おもと、あなた様)にこそおはしましけれ(では御座いませんか)。あな、うれしもうれし(まあ何て嬉しい事やら)。いづくより参りたまひたるぞ(何処からお見えになったのですか)。上は(うへは、御方様は)おはしますや(ご一緒ですか)」

と、いとおどろおどろしく泣く(大泣きに泣きます)。若き者にて見なれし世を思ひ出づるに(若い者としてこの女を見慣れていた頃を思い出せば)、隔て来にける年月数へられて(過ぎた年月の長さが思われて)、いとあはれなり(とても感慨深い)。

「まづ(先ずは)、おとどはおはすや(乳母殿はご一緒か)。若君は、いかがなりたまひにし(若君はどうなさって御出でか)。あてきと聞こえしは(あてきと言った童女は)」

とて(と右近は言って)、君の御ことは(母君のことは)、言ひ出でず(言い出しません)。

「皆おはします(皆ご一緒です)。姫君も大人になりておはします。まづ、おとどに、かくなむと聞こえむ(このことをお話します)」

とて入りぬ(と三条は言って幕内へ入りました)。

皆、驚きて(話を聞いた女房たちは皆、驚いて)、

「夢の心地もするかな(夢のようですね)」

「いとおつらく(何の便りもなく、ずいぶんひどいと)、言はむかたなく思ひきこゆる人に(言い様も無く思い申していた人に)、対面しぬべきことよ(やっと会えるんですね)」

とて、この隔てに寄り来たり(と言ってこの幕の所に寄って来ました)。気遠く隔てつる屏風だつもの(そして、よそよそしく隔てていた屏風のような幕を)、名残なくおし開けて(全て取り除いて)、まづ言ひやるべき方なく泣き交はす(先ずは言葉も無く泣き合います)。老い人は、ただ(老いた乳母はただ)、

「わが君は(姫の母君は)、いかがなりたまひにし(如何なさって御出でか)。ここらの年ごろ(この数年来)、夢にてもおはしまさむ所を見むと(夢にでも御出でになる所を知りたいと)、大願を立つれど(神宮に願掛けをしました)、遙かなる世界にて(遠い西海道のこととて)、風の音にてもえ聞き伝へたてまつらぬを(風の便りにも噂を聞き伝え致しませんのを)、いみじく悲しと思ふに(大変悲しく思って)、老いの身の残りとおどまりたるも(老いた身で生き永らえておりますのも)、いと心憂けれど(とても辛いのですが)、うち捨てたてまつりたまへる若君の(母御が置き捨てなさった若君の)、らうたくあはれにておはしますを(健気で可愛らしく御出でなのが)、冥途の絆

しに(よみぢのほだしに、あの世へ旅立つ足かせになつて)もてわづらひきこえてなむ(手を拱き致しては)、またたきはべる(目を瞑らずに居ります)」

と言ひ続ければ(と畳み掛けるので)、昔その折(右近は昔のその折に)、いふかひなかりしことよりも(如何にも説明の仕様が無かつた夕顔の突然死と光君の身分を秘匿するという事情で悶々と苦しんだ事よりも)、応へむ方なくわづらはしと思へども(今は応え様も無いほどに突き刺すように非難されている辛い気になったが)、

「いでや(いえもう)、聞こえてもかひなし(言い訳などは申しません)。御方は、はや亡せたまひにき(疾うにお亡くなりになりました)」

と言ふままに(と言うなり)、*二、三人ながら(ふたりみたりながら、二人から三人と)むせかへり(嗚咽し出して)、いとむつかしく(後はもう如何にもならず)、せきかねたり(その場は一同涙が止まらなかったのです)。*「二三人」は、注に<乳母、三条、右近らをさす。>とある。兵部君は居ないのだろうか。この場面描写はどうもはっきりしない。

[第五段 右近、初瀬観音に感謝]

日暮れぬと(日が暮れたと)、*急ぎたちて(宿の者が忙しく食事を下げたので)、御燈明(みあかし、御籠り法要)の事どもしたため果てて(の支度を整い終えて)、急がせば(従者たちが長谷寺へのお参りを急がせると)、なかなかいと心あわたたしくて立ち別る(右近と乳母たちは気忙しくそれぞれの一行に戻りました)。*「急ぎたちて」と「急がせば」と「心あわたたしくて」は、それぞれ主語が違うのだろう。注には、「立ち別る」が<室内で自分たちの部屋に戻ったことをいう。>とあり、「心あわたたしくて」の主語は乳母と右近に違い無い。で、「したため果てて」乳母たちを「急がせ」たのは従者だろうし、従者たちを「急ぎたち」たのが宿の者、かと思う。

「もろともにや(一緒に行きましようか)」と言へど、かたみに供の人のあやしと思ふべければ(互いに従者たちが事情が分からないままでの混乱が考えられたので)、この介にも(この慌しさでは乳母は豊後介にも)、ことのさまだに言ひ知らせあへず(このことのあらまじすら話し知らず事が出来ませんでした)。われも人もことに恥づかしくはあらで(女たちは自分も相手も既にこだわりがなくなる様子もなく)、皆下り立ちぬ(皆宿を出ました)。

右近は、人知れず目とどめて見るに(黙って乳母たち一行に目を止めて見ていたが)、なかにうつくしげなるうしろでの(その中に可愛らしい後姿の)、いといたうやつれて(もうひどく地味に)、卯月の単衣めくものに(うづきのひとへめくものに、四月頃の初夏に羽織る薄衣に)着こめたまへる髪(透影(髪まで覆った人が)、いとあたらしくめでたく見ゆ(とても勿体無く有難く見えました)。心苦しう悲しと見たてまつる(長く見放した相済まなさを申し訳なく存知奉ります)。

すこし足なれたる人は(参道を通いなれた右近は)、とく御堂に着きにけり(早く御堂に着いていました)。この君をもてわづらひきこえつつ(乳母たちは若君を介抱申し上げながら)、*初夜(しょや、夜八時の)行なふほどにぞ(読経会が始まる頃になつて)*上りたまへる(登廊を上がって本堂にお着きになりました)。いと騒がしく(御堂の中はとても騒がしく)人詣で混みて(ひとまうで

こみて、参詣の人が多くて)*ののしる(大盛況でした)。 *「初夜」はく戌の刻(いぬのとき、夜八時)のこと>とあり、またくその時刻に行く読経>ともある。 *「ののしる」はく大声で騒ぐ、悪口を言う>とあるが、く噂になる→評判が高い→盛況だ>とも古語辞典にある。前に「いと騒がしく」とあるので、この「ののしる」はく盛況>を言っているのだろう。

右近が*局は(うこんがつぼねは、右近の席は)、仏の右の方に近き間にしたり(仏像右手の前列の区画にしてありました)。この御師は(豊後介が頼んだ僧は)、まだ深からねばにや(まだ修行の浅い者なのか)、西の間に遠かりけるを(乳母たちの席が西の区画の後列だったので)、 *「局」についての注釈が無いのは意外だが、此処の記述は高天井の本尊講堂内のことを言っているのだろうから、寝殿内の曹司のような部屋である筈は無い。まして読経講であれば、仕切りといっても几帳で光を遮ることすら考えにくい。この文でも「局」は「間」の指定と読める。で、その「間」だが、今の本尊や本堂は当時のものでは無いようだが、間口九間、奥行五間という講堂の規模は、斜面の立地と位置が同じなら土台も同じ可能性は高いかも知れず、この際そのまま当時のものとして想像するほうが楽しい。本堂は南正面で舞台も南に出ているが、登り廊は本堂の東側に付いているので「西の間に遠かりける」は最奥となる。ただ、「仏の右の方」も仏から見れば西側かもしれないが、「近き間」なのでいずれ中央よりの前列なのだろう。

「なほ(どうぞ)、ここにおはしませ(こちらに御出で下さいませ)」

と(と右近が)、尋ね交はし言ひたれば(乳母の席を探して話し合ったので)、男どもをばとどめて(乳母は男衆はその場に残して)、介にかうかうと言ひあはせて(豊後介に事情を話し聞かせて)、こなたに移したてまつる(女衆で姫を右近の席へお連れ申し上げます)。

「かくあやしき身なれど(私は卑しい身分ですが)、ただ今の大殿になむさぶらひはべれば(現太政大臣のお邸に御仕え申しておりますので)、かくかすかなる道にても(こうした一寸した事でも)、らうがはしきことははべらじと頼みはべる(粗略な扱いを受けないように手配する事が出来るのです)。田舎びたる人をば(田舎風と見ると)、かやうの所には(こうした所には)、よからぬ生者(なまもの、修行の足りない僧)どもの、あなづらはしうするも(侮ったりするので)、かたじけなきことなり(姫君には恐れ多い事です)」

とて(と右近は言っで)、物語いとせまほしけれど(もっと話したかったが)、おどろおどろしき行なひの紛れ(僧たちが復唱する大きな読経の声に話し声が聞き取れず)、騒がしきにもよほされて(その読経にも促されて)、仏拝みたてまつる(仏に願いを唱え奉ります)。

右近は心のうちに、

「この人を、いかで尋ねきこえむと申しわたりつるに(何とか探し当てたいと願い申し続けて来たが)、*かつがつ(どうにか)、かくて見たてまつれば(こうしてお会いできたので)、今は思ひのごと(観音様に今の願うことは)、大臣の君の(おとどのきみの)、尋ねたてまつらむの御心ざし深かめるに(姫を探し申したいという御気持ちは強い筈なので)、*知らせたてまつりて(姫に殿の事をお話し申し上げて)、幸ひあらせたてまつりたまへ(どうか姫が殿の庇護で幸せにお成りになるようにして差し上げて下さいませ)」 *「かつがつ」は「且つ(一方では)」を重ねた言い方とあり、く不十

分ながら、何はともあれ、ともかくも>の意と古語辞典にある。ただ、「且つ」が<目を転じれば>という語義だとすれば<視野を広げる>ことでもあり、「かつがつ」は<更に視野を広げて、やっと思見出す>ような努力を思わせる語で、<ともかくも>で良いとは思いますが‘不十分だが’というよりは‘辛くも’という含みかと思う。とはいえ、今の「カツカツ」もそうだが、その‘辛くも’を少し引いて見る‘軽さ’も同時にあって、その‘軽さ’が‘不十分だが’という皮肉っぽい‘余裕’を漂わす。更に、敢えて、その‘余裕’を嫌えば「ギリギリ」だろうか。*「知らせ奉る」は誰が誰に誰を知らせるのか。観音様が殿に姫を、観音様が姫に殿を、右近が殿に姫を、右近が姫に殿を、と全部ありそうだが、この文中の「奉る」は総て右近が姫を「主」と敬う気持ちだと理解する。

など申しけり(などと申ししていました)。

[第六段 三条、初瀬観音に祈願]

国々より(いろいろな国から)、田舎人多く詣でたりけり(地方の人がたくさんお参りに来ていました)。*この国の守の北の方も(この大和国の国司の奥方も)、詣でたりけり(お参りしていました)。いかめしく勢ひたるをうらやみて(その着飾った女房たちを大勢従えた豪勢な参詣振りを羨んで)、この三条が言ふやう(三条の言い様は)、*「この国の守の北の方」は注に<長谷寺のある大和国の国司の北の方。>とある。

「*大悲者には(だいひさには、有難い観音様には)、異事も申さじ(他の願いは申しません)。あが姫君(わが姫君を)、*大弐の北の方(大宰府長官の奥方か)、ならずは(さもなくば)、当国の受領の北の方に為し奉らむ(なしたてまつらむ、して差し上げたく)。*三条らも(そうすれば、わたくしめも)、随分に栄えて(相応に豊かになって)、返り申しは仕うまつらむ(相応にお礼参りをお勤めいたします)」 *「大悲者」は観音菩薩の慈悲を称えて呼ぶ語。と注にある。とはいえ、慈悲深い菩薩様、と言い換えた所で、私には意味が良く分からない。 *「大弐」は大宰府の次官である。が、長官の「師(そち)」は宮家の高給名目上の名誉職で、「師」は筑前に赴任しない。そして、その場合の指揮は「大弐」が執ると定められているので、実際には「大弐」が現地長官となる。まして、大宰府は筑前の国司などでは無く、西海道の統括であり、次第に実権は衰えたとは言え、軍も備えた対外交渉の全権代である。乳母の夫だった「少弐」とは格段に違う権威を誇ったのだろう。 *「三条」と自分を名乗るのは、注に<仏や貴人の前では自分の実名を名乗る。>とある。

と、額に手を当てて念じ入りてをり。右近、「いとゆゆしくも言ふかな(何と情けなくも言うものだろうか)」と聞いて、

「いと、いたくこそ田舎びにけれな(もう、本当に田舎者になったものですね)。中将殿は(父御の中将殿は)、昔の御おぼえだにいかがおはしましし(昔の帝の御信頼もどれほど厚くいらしたることか)。まして、今は、天の下を御心にかけてたまへる大臣にて(朝政を与る大臣の御位にお就きにお成りで)、いかばかり*いつかき御仲に(その、どんなにか貴い身分の御血筋である)、御方しも(姫君ともあろう御方が)、*受領の妻にて(めにて、妻などで)、品定まりておはしまさむよ(納まる格式ではいらっしやいませんぞ)」 *「いつかき」は<厳しい、重々しい、尊い>。「御仲(おんなか)」は、注に<内大臣とその実娘という関係をいう。>とある。「いつかき御仲」は<尊い実の親子の間柄>とも読めるが、「いつかき」という語には大臣の重々しい地位と身分を示したい右近の意図があるような気がするし、<親子の間柄>なら<御血筋>とも言い表せそう。 *受領の台頭はこの物語の主軸の一つだ。大弐も受領も現地統括者

であり、今のような電子情報や高速移動が無かった時代の現場の存在はマクロでも総てを意味した、のだろう。現に後世の今となつては、荘園の拡大と武士階層の独立として認識される。

と言へば、

「*あなかま(いいえ)。たまへ(言わせて下さい)。大臣たちも(おとどたちも、大臣の話なども)しばし待て(また後で)。大式の御館の上の(だいにのみたちのうへの、大式の御宿舎の奥様が)、*清水の御寺(しみづのみてら、大宰府の清水で有名な御寺の)、観世音寺(くわんぜおんじ)に参りたまひし勢ひは(にお参りなされた時の大行列は)、帝の行幸(みゆき、御行楽の整列)に*やは劣れる(に劣ったものでは、ないでしょうに)。あな(もう)、*むくつけ(失礼ね)」 *「あなかま」は<ああ、やかましい>が語原らしく、人の言葉を制止する言い方となった、とある。だから、場面に応じて「またそんな」「いやねえ」「まあやめて」「あらやだ」などに言い換えられる。ところで、「あなかま」が<他人制止>なら、「たまへ」はその後の<自己主張>だから、「あなかま、たまへ」で<いえ、言わせて下さい>という決まり文句みたいなものなのだろう。 *「清水の御寺、観世音寺」は<福岡県太宰府(だざいふ)市観世音寺にある天台宗の寺。清水山普門院(せいすいざんふもんいん)と号する。>と Yahoo!百科にある。地図で見ると、大宰府政庁跡が観世音市2丁目で、観世音寺が観世音市5丁目という並びで、ほぼ隣という近さ。 *「やは」は反意ないし疑問を示す係助詞とのことで、「やは劣れる」は「は劣れり」という劣位断定文に文体を揃えて対抗すべく、「劣れるやはあらむ」という疑問提示文ないし反意表明文を倒置中止させた語法なのだろう。そして、この文はこのあやふやな、とは即ち三条のつたない認識に基づく、言い方によってのみ成立している。というのは、仮にこれを「は劣らず」と否劣位断定文にしたなら、文意は<大式の北の方が帝に劣らない>という有り得ない、口にするのも憚られる内容になってしまうからである。故にこの文は三条の至らなさを演出している、などと口説口説しいが、然程に今では分かり難い語法だ。 *「むくつけ」は「むくつけし」の口語音便だろう。「むくつけし」は以前に、「向く(面と向かって)」「付け(押し付け)」「し(がましい)」という無礼をたしなめる語、と考えてみたが、此处でも左様に理解できる。

とて(と三条は言つて)、なほさらに手をひき放たず(ますます額から手を離さずに)、拝み入りてをり(一心に拝んでいました)。

筑紫人は(つくしびとは、筑紫の姫君は)、三日籠もらむと(みかこもらむと、三日間泊り掛けでお祈りしよう)心ざしたまへり(お心積もりしていらっしやいました)。右近は、さしも思はざりけれど(そうは思っていなかったが)、かかるついで(この機会に)、のどかに聞こえむとて(親しく話をしよう)、籠もるべきよし(連泊する旨を)、大徳呼びて言ふ(だいとこよびていふ、高僧を呼んで伝えます)。御証文(みあかしぶみ、願ひ文)など書きたる(など書く上での)心ばへなど(右近の意向に添うものは)、さやうの人はくくだしうわきまへければ(こうした人は長々しい文面の書式を心得ているので)、常のことにて(いつものように右近はその主旨だけを)、

「例の(かねてからの)藤原の*瑠璃君(るりぎみ)といふが御ためにたてまつる(という方の御為に願ひ上げ奉ります)。よく祈り申したまへ(しっかりとお祈りを捧げて下さい)。その人(その方は)、このころなむ見たてまつり出でたる(つい最近に探し出し申し上げました)。その願ひも果たしたてまつるべし(その願ひが適った御礼も書いて仏に申し上げて下さい)」 *注に<『集成』は「瑠璃君」は、姫君の幼名かともいうが、恐らく右近の作った仮名であろう」と注す。>とある。

と言ふを聞くも(と言うのを聞けば)、あはれなり(一同身に沁みます)。

法師(その僧は)、「いと*かしこきことかな(何と有難いことでしょう)。*たゆみなく祈り申しはべる(熱心にお祈り申し上げた)験(しるし、顕れ)にこそはべれ(にこそ御座いましょう)」と言ふ(と言います)。 *「かしこし」は<恐れ多い、尊い、有難い、優れている、賢い>と幅広い。 *「たゆみなし」は<気を緩めない→熱心だ>。

いと騒がしう(そして、また熱っぽく)、夜一夜行なふ*なり(夜通しの法要を行うというわけです)。 *注に<「なり」伝聞推定の助動詞。『集成』は「局から、僧たちの仏前の礼拝のさまをうかがう趣旨」と注す。>とある。が、私には意味不明の注だ。この文の主語は、この念仏講の全体とも取れるし、右近たち一行ともとれるが、読んで面白いのは「法師」か「法師たち」だろう。何故なら、「たゆみなく祈り申しはべる験にこそはべれ」と言った上での「いと騒がしう」なら、法師に何らかのモチベーションが刺激されたらしい光景が思い描けるからである。いや、私は決して拝金主義に矮小化する心算で言っていない。そして、注の指摘は「行なへり」と「行なふなり」との違い、ということかと思うが、これらはいずれ語り手によるもので、「行なへり」が形態描写で「行なふなり」が事象報告なのであり、<形態描写>は聞き手にモチベーション認識を預けようとする書き方で、<事象報告>は語り手のモチベーション認識を含んだ、とは即ちモチベーションの存在を強調した書き方だと思う。つまり、「なり」は<伝聞推定の助動詞>ではなく<断定というか評価判定の助動詞>と読む他は無い。そこで、このノートを書く前は私は「なり」を<～なのです>で良いだろうと考えて、「行なふなり」を<行うのです>と言い換えていたが、今はこの「注」の所為で<行うというわけです>の方が良いのかと考えている。ただ、そうすると主語が「法師」に限定される嫌いがある、少し上品さに欠ける気もするが、変に気になる「注」ではある。

[第七段 右近、主人の光る源氏について語る]

明けぬれば(夜が明けたので)、*知れる大徳の坊に下りぬ(右近は世話を頼んでいる高僧の部屋に下がりました)。物語、心やすくとなるべし(そこで姫との語らいを親しくする心算なのでしょう)。姫君のいたくやつれたまへる(姫君がご自分のとても質素にしていらっしゃる姿を)、*恥づかしげに思したるさま(引け目にお思いの様子を)、*いとめでたく見ゆ(右近は心底から愛しく思っています)。 *「知る」は「見知る」よりは深い関係を示すと思われ、<分かる、親しむ>などとあるが、男女関係以外でも、立場上で<世話をする、責任を持つ>ともある。 *「恥づかしげ」は「恥づかしげなるさま」なら<姫君の優れた様子>を意味するが、「恥づかしげに思したるさま」なので<姫君が引け目にお思いの様子>を意味する。誰に引け目を感じているかと言えば、面對している右近になのだろう。 *「いとめでたく見ゆ」る対象は姫君なのに、「見ゆ」と敬語表現では無い。語り手の弁でも「見え給ふ」になりそう。というか、この文の視点は右近なので、主語は右近だ。ならば、「見え奉る」とでもなりそうだが、それは外形描写の書き方ということで、此処の「見ゆ」は右近が<感じた>内心の弁なのだろう。

「おぼえぬ高き交じらひをして(思いがけず高貴な方のお邸に仕えて)、多くの人をなむ見集むれど(多くの女の方というものを見て来ましたが)、殿の上の(お邸の奥様の)御容貌に似る人おはせじとなむ(御器量に匹敵する人はいらっしゃらないと)、年ごろ見たてまつるを(長年思い申ししていましたところ)、また(この度)、生ひ出でたまふ*姫君の御さま(お生まれになった姫君のお姿は)、いとことわりにめでたくおはします(当然に優れていらっしゃいます)。 *「姫君」は、注に<明石姫君をさす。この時、七歳。>とある。

かしづきたてまつりたまふさまも(殿が姫君を大事に御育てするなさり方も)、並びなかめるに(他の無いほどの豪華さなのに)、かうやつれたまへる御さまの(このように質素に為さっている貴方様が)、劣りたまふまじく見えたまふは(あちらの姫君に劣る事無くお見えになるのは)、ありがたうなむ(有難い事です)。

大臣の君(おとどのきみ)、父帝の御時より(ちちみかどのおんときより)、そこらの(宮中の)女御、后、それより(それに従う)下は(しもは、女房や侍女は)残るなく(全員を)見たてまつり集めたまへる御目にも(ご覧になっていらした御目にも)、*当代の御母后と聞こえしと(今上帝の御母后と申し上げた故中宮と)、この姫君の御容貌とをなむ、『よき人とはこれを言ふにやあらむとおぼゆる(美人とはこういう人を言うのだらうと思う)』と聞こえたまふ(と仰います)。 *「当代の御母后」とは冷泉帝の母后すなわち藤壺。と注にある。

見たてまつり並ぶるに(私が見比べ申し上げますには)、かの後の宮をば知りきこえず(故中宮は存じ上げませんで)、姫君はきよらにおはしませど(姫君は端整でいらっしゃいますが)、まだ、*片なりにて(まだお子様なので)、生ひ先ぞ推し量られたまふ(将来が楽しみという所でいらっしゃいます)。 *「かたなり」の語感は<半人前>だが、他の所でも使われていた語で、決して粗野な言い方ではなく、客観的に<発育が未成熟な年の子供>を言うようだ。

上の御容貌は(奥様の御顔立ちには)、*なほ誰か並びたまはむと(やはり誰も適わないだらうと)、なむ見えたまふ(のようにお見受けします)。殿も、すぐれたりと思し*ためるを(優れているとお思いのようだが)、言に出でては(言葉に出しては)、*何かは数へのうちには聞こえたまはむ(何故か美人の数にお入れなさらないようです)。『我に*並びたまへるこそ(私の妻にお成りだというのが)、君は*おほけなけれ(貴方には過ぎた身分なのでしょう)』となむ、戯れきこえたまふ(どのように戯れ申しなさいます)。 *「か～たまはむ」の反語表現。 *「ためり」は「たるめり」で<～ているようだ>。 *「かは～たまはむ」の反語表現。 *「並ぶ」は<同列の地位になる→夫婦でいる>。 *「おほけなし」は<分に過ぎている、恐れ多い>。

見たてまつるに(拝見いたしますに)、命延ぶる御ありさまどもを(命も延びる奥様や姫君のお目出度い御様子を)、またさるたぐひおはしませなむやとなむ思ひはべるに(他にはこうした類の御方はいらっしゃらないだらうとのように思ってまいりましたが)、いづくか劣りたまはむ(貴方様はこの御二人に少しも劣りなさいません)。ものは限りあるものなれば(物には限度がありますから)、すぐれたまへりとて(いくら優れていらっしゃると言っても)、*頂きを離れたる光やおはする(まさか仏様のように後光を頂いてはいらっしゃいませんが)。ただ(しかし)、これを(こうした方を)、すぐれたりとは聞こゆべきなめりかし(優れた方とは申し上げるべきなのでしょうとも) *「やは～おはする」の反語表現。注には<仏の光背に喩えた。『完訳』は「玉鬘の明るいさまを予感させる軽妙な話しぶり」と注す。>とある。

と、うち笑みて見たてまつれば(右近は微笑んで筑紫の姫君を拝し申し上げれば)、老い人もうれしと思ふ(乳母も嬉しく思います)。

[第八段 乳母、右近に依頼]

「かかる御さまを(このような尊い御方を)、ほとんどあやしき所に沈めたてまつりぬべかりしに(殆ど辺境の地に埋もれさせ申してしまい掛けていましたが)、あたらしく悲しうて(惜しまれて悲しくて)、*家かまどをも捨て(食う寝る所も捨てて)、*男女の頼むべき子どもにも引き別れてなむ(息子や娘の頼りになる筈の子供たちにも引き別れて)、かへりて知らぬ世の心地する京にまうで来し(今では却って見知らぬ所に思える京に遣って来たのです)。 *「かまど」は煮炊き釜。台所であり食事を作る家事の中心。「家竈」は<食う寝る所>。 *「をとこをんな」は注に<乳母の息子二郎三郎そして娘二人のうち長女は筑紫に残った。>とある。

あが御許(あがおもと、ねえあなた)、はやくよきさまに導ききこえたまへ(姫に早く良い道筋を付けて差し上げてください)。高き宮仕へしたまふ人は(高貴な家に仕えていらっしゃる人は)、おのづから行き交じりたるたよりものしたまふらむ(自ずと要人に近付ける手立てをお持ちの筈です)。父大臣に聞こしめされ(父君の内大臣に姫のことをお知らせになって)、数まへられたまふべきたばかり(娘と認めていただく算段を)、思し構へよ(考えて図ってください)」

と言ふ(と乳母が言います)。恥づかしう思いて(姫は恥ずかしくお思いになって)、うしろ向きたまへり(後ろを向いてしまわれました)。

「いでや(その事に付いては)、身こそ数ならねど(私は夫人方とは身分違いのただの雑用係ですが)、殿も御前近く召し使ひたまへば(殿もお側近くにお呼びになってお使い下さいますので)、ものの折ごとに(季節の変わり目などに)、『いかにならせたまひにけむ(忘れ形見はどうして御出ででしょうか)』と聞こえ出づるを(と話を御向け申しますと)、聞こしめし置きて(お聞き取りなさって)、『われいかで尋ねきこえむと思ふを(我は何とかその若君を探し出し申したいと思うので)、聞き出でたてまつりたらば(音信を耳にし申し致したなら、すぐに我に知らせよ)』となむ(どのように)、のたまはする(仰っていらっしゃいます)」

と言へば(と右近が言え)、

「大臣の君は(源氏の大臣は)、めでたくおはしますとも(ご立派でいらっしゃっても)、さるやむごとなき(今あなたがお話になった)妻ども(めども、大事に為さっている妻子が)おはしますなり(いらっしゃるではないですか)。まづまことの親とおはする大臣にを(先ずは実の親でいらっしゃる内大臣にこそ姫のことを)知らせたてまつりたまへ(お知らせ申し差し上げて下さい)」

など言ふに(などと乳母が言うので)、ありしさまなど語り出でて(右近は故主と源氏殿との在りし日の様子などを話し出して)、

「世に忘れがたく悲しきことになむ思して(そのように急死なされた故主を、殿はいつまでも忘れ難く悲しいこととお思いになって)、『かの御代はりに見たてまつらむ(我が女君の代わりに忘れ形見をお世話申したい)。子も少なきがさうざうしきに(子供の少ないのが寂しいので)、わが子を尋ね出でたると人には知らせて(実の子を探し出したと世間には言って)』と、そのかみよりのたまふなり(その昔から仰っているのです)。

心の幼かりけることは(私も若かったので)、よろづにもものつつましかりしほどにて(故主が中将殿から身を隠していらしたことや源氏殿が身分を隠していらしたことなどの事情で、何も口外出来なくなってしまって)、え尋ねても聞こえで過ぎしほどに(乳母殿を訪ねてご相談申し上げることもなく過ごしている内に)、少式になりたまへるよしは(ご主人が大宰少式にお成りになったことは)、御名にて知りにき(お名前を聞いて知っていました)。まかり申しに(赴任のご挨拶で)、殿に参りたまへりし日(殿のお邸にお見えになった日に)、ほの見たてまつりしかども(ちらりとお姿をお見掛けいたしました)、え聞こえで止みにき(お声を掛けず終いでした)。

さりとも(ですが)、姫君をば(姫君は)、かのありし夕顔の*五条にぞとどめたてまつりたまへらむとぞ思ひし(あの故主がお住まいだった夕顔の蔓が茂る五条の家の娘御たちに預け申して都に留め置き差し上げ為さるのだろうと書いていました)。あな(まあ)、いみじや(それが何と)。田舎人にて*おはしまさましよ(姫君は田舎の人になっていらっしゃったかもしれないんですね)」 *「五条」について、注に<『完訳』は「「五条」は不審。夕顔急死ころ玉鬘は西の京の乳母の家にいた」と注す。>とある。が、是はその一年後に乳母一家が筑前に下向する際の時のことであり、姫を京に残すのは幾つかの選択肢の一つとして検討されたらしいことも、第一章大二段の記述で窺われる。という理屈も有るには有るが、何より此処の右近の弁は、長年の疑念が払拭できて、互いに再会が喜べる高揚感の中で右近が乳母に甘えて皮肉ってみせた、という和んだ場面描写を読み取らないと作者が無然としそうに思える。いや、作者を無然とさせる読み方を否定する心算は無いが、疾うに昔の人なので、先ずは意を汲むべきかと。 *「おはしまさまし」は注に<「まし」反実仮想の助動詞。『集成』は「(姫君が) 田舎人でお過しになったかもしれない」。『完訳』は「田舎人になるところだった」と訳す。>とある。ただ、私にとって分かりにくかったのは「おはします」が「まさ」となる未然形の語感だ。未然とは<未だ然様ならず>なので、仮定・仮想というよりは現在進行形のような感触らしい。だから「まさまし」は、単に<いらっしゃるかもしれない>ではなく、<成り掛かっていらっしゃるかもしれない>なのだろう。だが、この仮想は現に姫が京に居ることによって、既に過去の事柄となっている。過去なら、<いらっしゃるかもしれない>という仮想は「おはしまさず(いらっしゃらない)」という現在否定で語られる。で、<成り掛かっていらっしゃるかもしれない>という危惧が<いらっしゃったかもしれない>と、幸いにして今は違うがという安堵感で語られる、のだろう。

など(などと右近と乳母たちは)、うち語らひつつ(語り合いながら)、日一日(一日中)、昔物語(昔話や)、念誦(ねんず、念仏祈祷)などしつつ(などをしていました)。

[第九段 右近、玉鬘一行と約束して別れる]

参り集ふ人のありさまども(休息していた僧房は参詣に来る人々の様子が)、*見下さるる方なり(見下ろせる所にある部屋でした)。前より行く水をば(前方を流れる川が)、初瀬川といふなりけり(初瀬川というのでした)。 *僧房は、今の境内案内図で見れば月輪院が「ふたもとの杉」に近い。そのまま駐車場を抜けて初瀬川に掛かる連歌橋を渡ると、與喜天満神社(よきてんまんじんじゃ)へ向かう山道が続く。

右近、

「二本の(ふたもとの)杉の立ち処を(すぎのたちどを)尋ねずは(たづねずは)
古川野辺に(ふるかはのべに)君を見ましや(きみをみましや) (和歌 22-08)

「歌に任せたお導き、この長谷寺のふたもとの杉（意識 22-08）」

*注にく右近の玉鬘への贈歌。「初瀬川古川の辺に二本ある杉年を経てまたもあひ見む二本ある杉」（古今集雑体歌、旋頭歌、一〇〇九、読人しらず）を踏まえる。>とある。「旋頭歌（せどうか）」は<「頭」は上句、「旋」は反復、五七七・五七七の音数律からなる六句体の和歌形式。>と古語辞典にある。で、この下歌の情緒背景だが、「はつせかは」はこの長谷寺眼下を流れる初瀬川、「ふるかは」は石上神宮の北辺を流れる布留川、ということで、そ「のへ」とは初瀬山から布留山に至る山々を眺めるヤマトの土地、なのだろう。で、その歌筋だが、「初せかは古かはの辺に」は「かは」を地名の文字取りと割り切って<会ったことが昔のことになるくらい>、「ふたもと離る過ぎ」は<二手に分かれて暫くは会えないが>、「年を経て又も相見む」は<何年か後には必ず再会しよう>、「ふたもと有る杉」は<二股になって生えている長谷寺の二本の杉のふもとで>、という洒落尽くし。「泊つ」「触る」「荒る」「相見る」は艶のあるイヤラシイ語のようだ。つまり当歌はこの下歌を丸々敷いているワケで、「二本の杉の立ち処を尋ねずは」が<古歌で再会の標と詠まれた‘二本杉’の在るこの長谷寺を訪れなかったら>、「布留川の辺に君を見ましや」が<同歌で‘布留川の辺’と詠まれたように長い間別れる事に成ってしまった貴方様に、このヤマトの地でお逢い出来たでしょうか>、という次第。ただ、與喜天満神社公式サイトにく右近のうたった古川野辺は、連歌橋の架かっている付近の初瀬川をいいます。>とあって、右近の「古川野辺に君を見ましや」は<初瀬川近くで貴方に会えたでしょうか>という味気ない解釈も出来るらしい。

*うれしき瀬にも（初瀬だけに、良い瀬にも、恵まれたのかと） *注にく歌に添えた詞。「祈りつつ頼みぞわたる初瀬川うれしき瀬にも流れ合ふやと」（古今六帖、川、藤原兼輔）を引歌とする。>とある。「瀬」は「背」に通じるようで、そびえる所、肩、山、のように水の流れの中で波立つ所、という語義らしい。で、波立つ所とは「浅瀬」であり、浅瀬は淵の深みのように水が滞ることがなく、流れ自体も「瀬」と言う。また、浅瀬から淵に落ち込む速い流れは「早瀬」、そうした変化のある水流が立てる音は「瀬音」、などともある。ところで、波立つ所は目立つ。で、特長のある変化や出来事も「瀬」と言い、<折節>のことでもある。引歌も再会を願う歌なのだろう。「祈りつつ」は<再会を願って>、「頼みぞわたる初瀬川」は<長谷寺の御利益を頼りに初瀬川を渡ってお参りするのとは>、「うれしき瀬にも流れ合ふやと」は<川が合流するように探し人に出会える良い機会に恵まれるかと期待してです>、といった筋だろうか。余談だが、「頼みぞわたる初瀬川」は「與喜天神」のことかとも思ったが、「與喜天神」は道真公（845-903）を祀っていて948年の創建とあり、藤原兼輔（ふじわらのかねすけ）は877-933年の紫式部の曾祖父ということで、「與喜天神」は有り得なかった。因みに、長谷寺の創建も不確からしいが、770年頃に成立した万葉集に初瀬山を詠んだ歌は多いとあり、初瀬山で最大の長谷寺が少なくとも其辺の権威の継承者らしい蓋然性は高い。

と聞こゆ（と申し上げます）。

「初瀬川はやくのことは知らねども、今日の逢ふ瀬に身さへ流れぬ」（和歌 22-09）」

「昔のことは知らないし、明日のことは分からない」（意識 22-09）」

*当歌の「はつせかは」は<初瀬川の流れが速いことから「早し」にかかる枕詞>であり、同時に場所柄に因んだ語として「今日の逢ふ瀬」を補説し、「身さへ流れぬ」の言い回しを「逢瀬」と共に演出する。「早くのこと」は、早くから在った事の意で<昔のこと>。で歌筋は、「初瀬川はやくのことは知らねども」が<流れの早い初瀬川のほとりの事と言っても早くからの昔のことは知らないが>、「けふのあふせにみさへながれぬ」が<今日の出会いが初瀬川の瀬に縁があるだけに、川の流れに身を流されてしまうように先の事は成り行きに身を任せます>、ということか。

と(とお詠みになって)、うち泣きておはするさま(泣いていらっしやる姫君は)、いと*めやすし(非の打ち所がありません)。 *「目安し」は<見た目に感じがよい。見苦しくない。また、無難だ。>と大辞泉にある。「さま」とあって「めやすし」だから<見た目に感じがよい>という意味は在るだろうが、当然に歌の詠みっぷりが技巧と情緒共に優れているという感慨も示している。だから全体の評価として<難点が無い、欠点が無い>で、なるべく姫に失礼の無い言い方なら<非の打ち所が無い>。

「容貌はいとかくめでたくきよげながら(見た目は実にこのように優れて美しくとも)、田舎び(風雅を知らぬ田舎者で)、*こちこちしうおはせましかば(狭量な考えでいらっしやったら)、いかに玉の瑕ならまし(何とも玉に瑕であったことでしょう)。いで(いや本当に)、あはれ(有難い事に)、いかでかく生ひ出でたまひけむ(よくもこれほど立派にお育ち為されました)」 *「こちこちし」は<ぶしつけである、無骨である>とあって、「ごつごつ」に近い語感のように古語辞典で説明されている。が、それでは姫の形容には相応はない。むしろ、今の「こちこち」が示す<緊張して心のゆとりをなくすさま。>や<頑固で融通のきかないさま。>の方がこの場の言い方としては分かり易い。というのは、姫は「身さへ流れぬ」と我を張らずに人を信頼して身を任せる、という、反面では自立心に欠けるかに見えるものの、それだけに仕える者を大事にするという貴人の心得を身に付けていたことを示す歌を詠んでいたからである。

と(と右近は)、おとどをうれしく思ふ(乳母殿に感謝します)。

母君は、ただ(姫の故母君は偏に)いと若やかにおほどかにて(とても若やいでおっとりして)、やはやはとぞ(柔らかな物腰で)、たをやぎたまへりし(お優しかった)。これは気高く(この姫君は気品が高く)、もてなしなど恥づかしげに(物腰もこちらが気後れするほど)、よしめきたまへり(都風の作法に精通していらっしやる)。筑紫を*心にくく思ひなすに(このように姫が立派にお育ちになった、筑紫という所を右近は京文化の行き届いた所かと考えてみるが)、皆、見し人は里びにたるに(昔から見知った人たちは田舎じみていたのが)、*心得がたくなむ(その考えでは納得できないものでした)。 *「心憎し」は<悪くない印象を受ける、見どころが在ると思う、意外に心惹かれる>という感じかと思うが、右近が此処で関心を持っているのは「雅」なのだろう。 *「心得難し」は<理解できない、納得できない>。だが、乳母たちは自分たちは土地の者に反感を持たれている中で食い繋ぐ生活苦に喘ぎながら、姫だけは深窓の令嬢として守り抜いてきたのであり、先に「おとどをうれしく思ふ」がそうした事情をいくらかは聞いた上での感想だとしたら、此処の「心得がたくなむ」は軽口めいた言い回しかと思うが、私は此処の文からは楽しい気分を感じ取れない。右近の高揚感が良いとしても、こうした軽口が叩けるほど乳母たちの事情は軽く無い。

暮るれば、御堂に上りて(姫は日が暮れば御堂に上って法要を受け)、またの日も行なひ暮らしたまふ(翌日はまた僧房に下りて自分で念仏を唱えてお過ごしになります)。秋風、谷より遙かに吹きおぼりて、いと肌寒きに、ものいとあはれなる心どもには(再会を果たして感慨無量のこの人たちは)、よろづ思ひ続けられて(次々と話題が尽きず)、人並々ならむこともありがたきことと思ひ沈みつるを(姫は今までは人並みに親の庇護を受けられるのも有りそうも無いことと悲観なさっていらしたが)、この人の物語のついでに(右近のいろいろな話の中で)、父大臣の御ありさま(父君の藤原大臣のご様子に)、腹々の何ともあるまじき御子ども(最上位でもない何人かの夫人が生んだ特別の身分でもない御子息たちを)、皆ものめかしなしたてたまふを聞けば(皆一人前の地位に就かせなさっていると聞いて)、かかる(自分のような)下草(したくさ、日陰者も)

頼もしくぞ思しなりぬる(そうした高貴な人を頼りに出来るかもしれないと、心強くお思いになるのです)。

出づとても(長谷寺から帰る際にも)、かたみに宿る所も問ひ交はして(互いに住所を聞き交わして)、もしまた追ひ惑はしたらむ時と(もしも再び姫君を見失い申した時は遣り切れないと)、危ふく思ひけり(右近は心配に思いました)。*右近が家は、六条の院近きわたりなりければ、ほど遠からで、言ひ交はすも*たつき出で来ぬる心地しけり(連絡の取りようが出来たと安心したのです)。*注に<右近の家は五条、玉鬘一行の宿は九条である。>とある。右近の家が五条と言うのは後述の前引きだろうか。今までにそうした記事は無い。右近は光君の直接の身の回りの世話をする女房ではなく、専ら話し相手という位置付けなのだろう。